

主日礼拝説教「さあ、歩いて行こう！」

日本基督教団石神井教会 2016年9月25日

【旧約聖書日課】

ダニエル書 12章1～4節

- 1 その時、大天使長ミカエルが立つ。
彼はお前の民の子らを守護する。
その時まで、苦難が続く。
国が始まって以来
かつてなかったほどの苦難が。
しかし、その時には救われるであろう。
お前の民、あの書に記された人々は。
- 2 多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。
ある者は永遠の生命に入り
ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。
- 3 目覚めた人々は天空の光のように輝き、
多くの者の救いとなった人々は
とこしえに星と輝く。
- 4 ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前は
これらのことを秘め、この書を封じておきなさい。
多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。」

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙二 5章1～10節

- 1 わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。2 わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。3 それを脱いでも、わたしたちは裸のままではありません。4 この幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいていますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。5 わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださいましたのは、神です。神は、その保証として「霊」を与えてくださったのです。
- 6 それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。7 目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。8 わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。9 だから、

体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。10 なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。

【福音書日課】

ヨハネによる福音書 11章1～16節

1 ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。2 このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。3 姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。4 イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。6 ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。7 それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」8 弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」9 イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。10 しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」11 こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」12 弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。13 イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。14 そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。15 わたしがある場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」16 すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

光り輝くところに…

9月も最後の日曜日を迎えましたので、「月報」で来月の教会の予定をお知らせいたしました。来る10月は、皆さんにお覚えいただきたい行事が続きます。どの行事についても祈りのうちに加わっていただきたいと願っていますが、もしかすると、すでに、その先の11月に計画している行事、「オープン・チャーチ」に関心が向かってしまっていらっしゃる方も少なくないかもしれません。

「オープン・チャーチ」は、文字通り、教会を開放して、一日、どなたでもおいでいただけるようにし、教会の営みに触れていただくというものです。皆さんのご家族やご友人で、あるいは地域の方々で、「普段の教会には行きづらい」、「礼拝に出るのは抵抗がある」と思っていらっしゃるような方に、まずは、教会の中に、建物の中に、おいでいただく機会をつくる。それが目的です。もちろん、礼拝に出ていただければ一番よいのですが、そうでなくてもよい。教会の建物と、教会の人（わたしたち！）とに、触れていただく。この中に、身を置いていただく。そして、教会が大切にしていること、わたしたちが中心に置いていることに、少しでも近づいていただけるようにする。これがうまくいくかどうかは、皆さん次第です。「オープン・チャーチ」の機会にお迎えする方々が、教会の建物の中で何を見るか、誰を見るか。皆さんです。わたしたちです。

4月から、平日でも昼間は原則として教会堂の玄関扉の鍵を開けておくようにしています。会堂1階の一室にはわたしがおりますので、不用心ということはないのですが、初めの頃は、ご奉仕に来てくださった方が、わざわざ裏口から入っていらしたり、正面玄関の鍵を閉めて裏口から帰ろうとなさったり、ということがありました。最近は、皆さんが正面玄関から当たり前のように入ってきてくださるようです。けれども、鍵が開いていても、教会員以外の方が訪ねてきて、中に入ってこられて、礼拝堂でお祈りして行かれる、というようなことは、ほとんどありません。鍵が開いているだけでは、なかなか、だれでも出入り自由という訳にはいかないようです。扉を開いておくとか、案内表示を工夫するとかすれば、どなたでも自由に出入りしてくださるようになるでしょうか。

そういう工夫も必要ですが、実際にもっと大切なことは、会堂の玄関扉をオープンにすることではなくて、わたしたち自身をオープンにすることでしょう。わたしたちの心、わたしたちの考えを、外に向けて開かれたものにする。

この会堂の屋根につけられている十字架と礼拝堂後方の大きなガラス窓は、照明器具でライトアップできるようになっています。なかなか魅力的ですが、これが夜、灯っていると、何か集まりがあると思って訪ねてくる方がいるのではないかと思って、普段は点けていません。本当は、そんな心配をしないで点けておいたらよいのです。しかし、大切なことは、ここに来れば、昼間でも光に照らされて輝くものを見ることができるといことです。皆さんのことです。皆さんが、キリストの光に照らされて輝く存在として、ここにいる。開かれたキリストの心を与えられたひとりとして、キリストの光を帯びて、ここにいる。その皆さんのお姿を、「オープン・チャーチ」では、来堂者に見ていただくのです。

《二重国籍》を解消する？

そのように言うと、皆さんの中には抵抗を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、「自分はキリストの光を帯びているなどとはとても言えない未熟な信仰者だから、躓きにならないように、信者でない人には見ないでもらいたい」とか、「最終的に神への信仰に導かれてもらいたいと考えているのだから、『人を見るのではなく、神を見てください』というやり方に終始徹するべきだ」と。

でも、わたしたちが信じる神は、昔も今も、人を通してご自身をお示しになれる御方です。昔、預言者を通してお語りになられた御方は、かつて、イエスという人を通してご自身の御言葉と御業をはっきりと現してくださった。そして、その後、今に至るまで、聖霊の宿る教会とそこに連なる信仰者をお用いになられて、御言葉と御業とをこの世界に明らかにしようとしてくださっている。

ところが、どういうわけか、神がわたしたちをお用いくださるということに、わたしたちは抵抗したがるのです。神がお選びくださっていても、「まだ早い」とか「今ではない」とか、「このことではない」と言って、何とか神のお与えくださる使命から逃れようとしてしまうのが、わたしたちなのでしょうか。

世間で、政治家の二重国籍の問題が話題になっていました。使徒パウロは、フィリピの教会に宛てた手紙の中で、「わたしたちの国籍（本国）は天にある」と言いました。墓石に刻まれることもある、わたしたちにとっては大切な聖句です。皆さんの中にも、この聖句を大切になさっている方も多いことでしょう。暗誦して心に刻む価値のある聖句です。けれども、皆さんは、本当に、そう思っていますか。「わたしの国籍は天にある」と、自信をもって言えるでしょうか。もしかすると、「わたしの国籍は天にある」と大きな声で宣言したのに続いて、小さな声で、「そして地上にもある」と付け加えているのではないのでしょうか。

確かに、わたしたちは、地上に命を与えられた者として、地上に国籍を持った者です。日本国とかアメリカ合衆国という地上の国家が保証する国籍を有するというだけのことでありません。地上に自分の居場所を持ち、地上の営みに自分の労力をささげ、地上の価値観によって物事を判断する者であるという意味で、「地上に国籍がある」者として生きてきた。

それに対して、わたしたちは、キリストによって「天の国籍」を与えられたのです。洗礼によって、「天の国籍」を与えられた者になった。にもかかわらず、わたしたちは、「地上の国籍」を放棄しないで残している。両方持っていて、上手に使い分けようとしてしまう。ときに「天の国籍」を与えられた者としてふるまい、都合が悪くなると「地上の国籍」を持ち出してくるということをする。

これは、わたしたちにとって悩ましい現実です。けれども、そのような悩ましさの中に、わたしたちは生かされている。「天にある永遠の住みか」を約束いただいたのだから、さっさと「地上の住みか」を脱ぎ捨てて、「天にある永遠の住みか」を着させていただければいいのに、そうはならない。むしろ、「地上の住みか」を着たまま、その上に「天からの永遠の住みか」を着るようにさせられている。わたしたちの悩ましい現実を、パウロは、そのように言い表すのです。

さあ、起こしに行こう！

ご自分が今まで身に帯びてきた「地上の住みか」に、皆さんは未練がありますか。未練がある人も、そうでない人も、いるでしょう。でも、未練があるかどうかは問題なわけではないのです。

わたしたちは皆、地上にあつて「地上の住みか」を完全に脱ぎ捨てるわけにはいかない。このことが問題なのです。わたしたちは、地上に生きている限り、どうしても、「地上の住みか」を完全に脱ぎ捨ててしまうことはできない。考えてみてください。「これを完全に脱ぎ捨てました」と言える人があるのでしょうか。聖人と呼ばれる人ならば、そう言ってもよいのでしょうか。けれども、あの使徒パウロでさえ、「地上の住みかを完全に脱ぎ捨てた」とは言えなかったのです。わたしたちは、生まれたときから身に帯びてきた「地上の住みか」を、地上に生きる限り、どうしても完全に脱ぎ捨てることはできない。

けれども、その「地上の住みか」を死なせてしまうことはできる。事実上無力にしてしまうことはできる。「地上の住みか」を身に帯びたまま、キリストを上から着させていただくのです。「天から与えられる住みか」を、上に重ね着せていただくのです。

キリストは、わたしたちが身に帯びてきた「地上の住みか」を死なせてしまうことのできるお方です。病気のラザロを見舞う日を二日遅らせて、主イエスは、ラザロを死なせました。ひとたび死なせました。ラザロの体を、死んだものとして、墓に葬らせなさいました。主イエスは、「地上の住みか」を身にまとっていたラザロを、死なせなさいました。けれども、その死んだラザロのところに、主イエスは向かわれるのです。「ラザロを起こしに行く」と言われるのです。ラザロに「天からの永遠の住みか」をお与えになられるのです。

主イエスご自身、「地上の住みか」を十字架の上で死なせなさいました。そして、墓の中からご復活なさって、「天から与えられる永遠の命」を御身にまわられたのです。そのご復活なさった主イエスの御体が、間違いなく十字架の上で血を流して死なれた御体であったと、弟子たちは語りました。十字架の上で死んだ主イエスの「地上の住みか」は、「天から与えられた永遠の命」に上から覆い包まれました。死は、命に飲み込まれたのです。

主イエスは、わたしたちに近づいてくださり、その御体をお与えくださって、ご自身と同じ死と復活の命にあずからせてくださるのです。

わたしたちの「地上の住みか」は、主イエスの死と共にひとたび死に渡されました。死んだのならば、もはや「地上の国籍」から離れているはずですが、その、ひとたび死んだ「地上の住みか」の上に、わたしたちは、キリストという新しい衣をまとうのです。「天からの与えられる永遠の住みか」を上に着るのです。

キリストを身にまとい、「天の住みか」を上に着させていただいているわたしたちが、今やキリストと同じ光を帯びさせていただくのは、当然のことです。この光り輝く器を、土の中に埋めてはいけません。たとえ中身は土の器だとしても、わたしたちは、光り輝くキリストを身にまわらせていただいているのです。